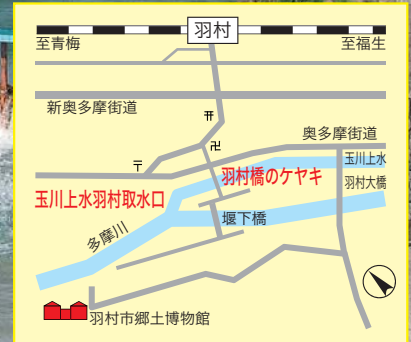


玉川上水羽村取水口

交通及び案内図

玉川上水羽村取水口

JR青梅線「羽村」駅西口から
徒歩約10分



玉川上水の起点

玉川上水は、今から355年前の承応2年（1653）に、江戸城及び江戸市中の生活用水の確保のために開削されました。

羽村が取水口に選ばれた理由としては、

- ①水源が多摩川に求められたこと
- ②武蔵野台地の段丘崖を乗り越えるために、江戸から適当な標高差があったこと
- ③多摩川の流路が大きく左にカーブして、効率的に取水することが可能だったことなどがあげられます。

江戸時代の取水口の仕組み

取水口は、大きく見て多摩川の水をせき止める堰と、その水を玉川上水へ導く水門という構造になっています。堰は「杵」を川底に固定して土台を作り、そこへ「投渡木」と呼ばれる丸太を横に渡して、その下に丸太を立て隙間を筵、砂利などで塞いで水をせき止めていました。そのため「投渡堰」と呼ばれています。大水の時は、この「投渡木」を外して筵などを流してしまい、堰のダメージを最小限に抑えました。水門には「差蓋」と呼ばれる板が数枚はめ込まれ、水量が調節されて

いました。一の水門は堰と直行するように設けられ、多摩川からの取水量を調節します。二の水門は、玉川上水路の始まりとして、水路に入る水量を調整して余分な水を小吐き水門から多摩川へ戻す役割がありました。

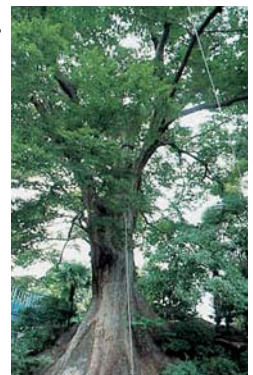


取水口

現在の取水口の構造は、江戸時代と比べても材料が木材からコンクリート、レンガ、鋼鉄などに变化しているぐらいです。355年も基本が変わらないということは、それが一番安定して効率的だといえることができます。

上水を見守る大ケヤキ

玉川上水にかかる最初の橋、羽村橋の近くに東京都指定天然記念物「羽村橋のケヤキ」があります。段丘崖からの豊富な湧水に助けられて、都内でも稀な巨木に生育しています。樹齢は400年とも600年ともいわれているので、玉川上水の歴史をそのまま見下ろしてきたのでしょう。



羽村橋のケヤキ

取水口の活用

玉川上水羽村取水口には多くの見学者が訪れます。中でも小学4年生の社会科見学は年間180校近くあり、「羽村市＝玉川上水取水口」というイメージを確実に定着させています。

玉川上水は平成15年に史跡に指定されましたが、河川管理等の問題もあり、取水口の構造物はその指定範囲に含まれていません。しかし、玉川上水の出発点であり、その象徴である投渡堰や水門等は、玉川上水と一体となる重要で貴重な文化財なのです。

問い合わせ先

羽村市郷土博物館
電話 042-558-2561 FAX 042-558-9956
E-Mail s709000@city.hamura.tokyo.jp